

彼岸過迄

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1912年)「朝日新聞」

参考：『彼岸花』監督：小津安二郎 (1958年)

原作：里美淳(1958年) 脚本：野田高悟 小津安二郎

出演：平山渉 佐分利信 佐々木幸子 山本富士子
平山清子 田中絹代 三上周吉 笠智衆
平山節子 有馬稲子 三上文子 久我美子

あなたは卑怯です。徳義的に卑怯です。

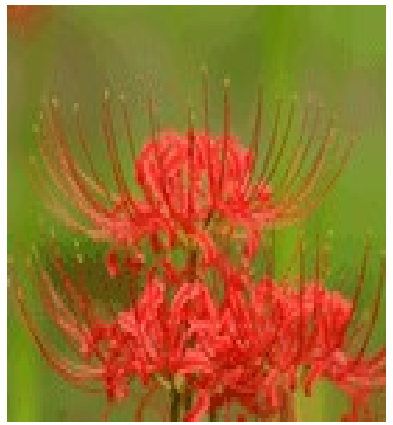
『彼岸過迄』という題名は、漱石の前書によれば、元日からはじめて、彼岸過迄に書く予定という理由から名づけたという。

久しぶりだから成るべく面白いものを書かなければ済まないという気がいくらかあるともいう。これは修善寺の大患で入院していたこともあり、新聞小説の連載がひさしぶりという意味だ。

しかし、『彼岸過迄』が新聞の一般読者にとって面白い小説だったかどうかは疑わしい。敬太郎という大学の法学部を卒業して、就職口を探している青年が主人公の話とっていると、そのうち須永の話になり、最後は松本の話になる。

須永は敬太郎の友人で、松本は須永の叔父。二人とも高等遊民で、働いていない。敬太郎は就職する気はあっても、最初のうちはやはり遊民だ。いったい誰が小説の主人公なのか。敬太郎の話も須永の話も松本の話も尻切れとんぼで終わる。私のような単純な読者は頭が混乱し、ついていけなくなる。頭をきりかえ、『文学論』の応用、実験と思つて、おつきあいするしかない。

須永市藏は敬太郎同様、大学の法学部を卒業しており、頭も悪くないが、まったく働く意志がない男だ。田口と叔母(母の妹)の娘千代子と結婚することを母親が望んでおり、交際しているが、いざ結婚となると消極的になる。千代子が嫌いなのかというとそうでもない。千代子が高木とい



彼岸過迄

映画文学人生論

う男と親しくすると、嫉妬して、不機嫌になる。

とうとう千代子から「貴方は卑怯です。徳義的に卑怯です」と、言われてしまった。そこまで言われても市藏の態度は相変わらず煮え切らない。

それに比べると、松本には妻と四人の子供がいる。高等遊民といっても家庭人、社会人である。四人の子供のうち二歳の女の子が雨の降る日に死んでしまった。それ以来、雨の降る日に紹介状を持って会いに来る男が嫌になったという。漱石は五女雛子を二歳のとき亡くした。その経験を『彼岸過迄』に書いたとすれば、松本のモデルは漱石だが、漱石自身は遊民とはいえない。

映画は題名が類似し、いい加減な題名のつけ方も似ているところから里見弴原作、小津安二郎監督の『彼岸花』を参考にした。適齡期の娘の節子（有馬稲子）を手放したくない父親（佐分利信）が反対し続けたあげく、結婚を許す話である。

映画の題名がいいかげんだと思ったのは彼岸花の扱いだ。肝心の彼岸花が撮られていないし、登場する美女のうち誰が彼岸花なのかわからない。

里見弴の原作を読むと、彼岸花を見て「涙が零れた」と三上周吉（笠智衆）が嘆いている。娘の文子（久我美子）が尼寺に行ったからだ。つまり彼岸花は久我美子のはずだが、映画の主演は有馬稲子で、花嫁姿のハッピーエンドとなっている。

雨の降る日の尼寺や彼岸花